留学報告書
水信里穂

中国留学でたくさんの人に出会い、多くの新しい経験をした。
私のルームメイトは希望さんとゆう、22 歳の韓国人だった。彼女は私たちが北京に着く 2 週間ほど前から、留学に来ていた。部屋にいる時は彼女と中国語で話をしていることが多かった。31 日の朝、はじめて彼女と話した時、中国語の授業で習った自己紹介の単元とほぼ同じような内容の会話をした。しかし、聞き取れた内容はごくわずかだった。会話の最中、辞書で分からない単語を引いていたが、10 分ほどの会話で、調べた単語数は 40 個ほどになっていた。分からない文法も多く、話している内容を理解するなど、到底できなかった。彼女は、私と比べて、とても流暢に中国語を話した。私があまり中国語を話せないことを知ってからは、パソコンの翻訳機能を使い、中国語を日本語に変えて勉強を教えてくれ、ジェスチャーを多く使い会話してくれた。
北京に着いてから、2 週間が経ち、北京師範大学での授業が始まった。1 回目の授業を受け終わった時には、ひどい絶望感を味わった。宿題はどこが出されているのか分からず、自分に質問が当てられているのかも分からず、いつ授業が終わったのかも分からなかった。悔しい思いで部屋に戻った。正直、これから 4 ヶ月半乗り切れるか不安で仕方なかった。事前にもっと多くの単語を覚え、そしてより耳を鍛えるべきだったと後悔した。それからしばらくの北京での生活は、単語を調べて、覚える、とゆう生活の繰り返しだった。
そんな日が 1 ヶ月続いた頃、授業が聞き取れ、内容が分かるようになっていた。クラスメート同士の会話が聞き取れるようになっていた。先生の話す内容に、たまにジョークが混ざっていることに気が付いた。そのジョークに対し、クラスメートたちと同じタイミングで笑えるようになっていた。これをきっかけに、その後は勉強に対するやる気がより増していった。
この時、聞き取れることの嬉しさ、喜び、達成感を知ったが、それと同時に話すことのできない悔しさも感じた。自分の知っている文法や単語の範囲で、話したいことを伝えようとしても、どうしても単語数が足りない。知っている文法が少なすぎる。どうにか知っている範囲で、会話をしていたが、話のすれ違いはどうしても避けられなかった。このときから、自分の考えを中国語の文にする練習を始めた。日記を中国語で書くことで、文を作る練習になると思い、しばらくこれを続けた。するとその後は、徐々にだが
、ルームメイトとの会話が弾むようになり、クラスメートと自然に会話ができるようになっていった。担当の先生に自分が聞きたいことを質問できるようになっていった。聞き取れる喜びよりもはるかに、自分の話したいことを相手に伝えられるとゆう喜びは大きかった。
中国留学から 2 カ月経ったころ、ルームメイトの希望さんから、中国語が前よりだんだん上手くなっているよ、と言われた。相手の言いたいことが理解でき、自分の気持ちや、考えを伝えることがこんなにも楽しいことなのだと、はじめて知った。そして、彼女とのコミュ

ニケーションを円滑に進めてくれる、中国語がより好きになった。彼女との会話が弾むようになり、彼女の母国である韓国のこと、家族のこと、高校での生活のこと、互いの友達のことなど、私たちの会話は以前と比べて幅が広がっていった。留学に来たばかりのころ、中国語での日常会話もままならなかった私だか、そんな私につきあい、毎日辞書を引きながら中国語を教えてくれた彼女に本当に感謝している。

中国での生活では、毎日見るもの食べるもの感じるもの聞くもの、全てが新鮮で、外に出てベンチに座っているだけで多くの収穫があった。

北京では、道を歩く人々は唾を吐き捨てていた。おじさんも、ちいさな子どもも、ヒールに派手なワンピースの綺麗な女性も、みんな同じようにしていた。この光景を見るのは日常茶飯事で珍しいことではなかった。しかし、この光景だけは 4 ヶ月半北京で生活しても見慣れなかった。クラスメートだったアイルランド人もイギリス人も韓国人も、私と同じように見慣れないと話していた。道を歩く時、どうしても下を見て唾がない所を探しながら歩いてしまうことは、4 ヶ月半経っても変わらなかった。しかし、それ以外の光景や習慣は日本に帰る頃には、私にとって自然なものとなり、そして馴染んでいたと思う。

中国に着いたばかりの頃は、中国のトイレが生理的に受け付けなかった。日本のトイレと比べると、清潔感が無かった。また、日本とトイレの作りも違うため、なかなか慣れなかった。最初の頃は、比較的綺麗なトイレを探して使っていたが、4 ヶ月経った頃にはどこでも使えるようになっていた。

また、留学から 2 カ月経った頃、地下鉄を利用して、王府井に出かけた。この時、電車の中で、うずくまりながら物乞いをする体に不自由のある男性を見た。初めての事で驚き、私はその男性をじっと見てしまっていた。彼は近づいてきて私の足を触っていったと思う。しばらく経ってから目をそらして、周りの席に座っていた中国人を見見回したが、多くの人は床を見て、電車内にあるテレビを見ていた。それまで話をしていた人たち同士は会話を止めて、静かに外を見ていた。地下鉄を出ると、今度は道端に倒れて物乞いをする女性を見た。この女性は見た目には体に不自由は無かった。先ほどのこともあるので、今度は目を合わせず、すばやく前を通った。この光景を、地下鉄を利用するたびに、北京市内に出かける度に見た。そのうち、最初に見たときほどの衝撃はなくなり、流し見るようになっていった。やるせない気持ちになったことを覚えている。物乞いをしていた人たちに、どのような態度でいればよかったのか、帰国後も考えたが分からなかった。

中国で食事の面については困ることはあまりなかった。学食でご飯を済ませれば安いし、慣れてくればどの料理が自分の舌に合うかなんとなく分かってくる。最初は料理選びに失敗し、辛くて少しも食べられない料理に当たることも度々あったが、その後は料理選びで失敗することはあまりなかった。日本食を食べたくなった時は、探せばいくらでも日本食の店はあるし、大きなデパートに行けば、韓国料理、日本料理など多くの国の料理が一箇所で食べられるブースなどもあったため、食べたいものを食べられなくて苦労することはあまりなかった。ガイドブックやインターネットを使い、気になるお店に目星をつけて外食に出か

けることが多かった。校内を出て、交通機関を使い、外にご飯を食べに出かける回数も留学期間が長くなるにつれて、徐々に増えていった。北京師範大学の最寄りの駅から 5 分の距離にある、火鍋の店に出かけた時、私の話す中国語があまりにも店員に通じず、ショックを受けた。授業で担任の先生が話す中国語は、生徒に聞き取りやすいように、丁寧に、はっきりと発音されているため聞きとりやすかった。ルームメイトの中国語はジェスチャーを使いながらゆっくりと話されていたため、これもまた聞きやすかった。北京師範大学の校内の食堂やスーパーでの会話は、パターン化されていたため、多少の訛りがあったとしても、それでも話を予想して聞けたので、内容を理解しやすかった。しかし、この火鍋店では、私が火鍋のルールやシステムを知らなかったので、会話の内容はそこからの説明となり、普段は使わない単語だらけの文章にかなり戸惑った。言葉があまり通じないことを店員も理解したようだったが、彼女は英語をあまり話せないようすで互いにコミュニケーションをとるのにとても苦労した。店員がタレの作り方を私に教えてくれた時、調味料の種類の単語を理解できず戸惑っていた私を見て、彼女が代わりにタレを作ってくれた。それまで中国で受けていた接客サービスとの違いにこの時とても驚いた。それまで中国で受けたサービスで印象的だったものは、飲食店で店員が接客中にケータイをいじっていることや、夜コンビニエンスストアに買い物に行った時、店内にいる店員のほとんどが、小さめのベッドや椅子で仮眠をしていたことなど、日本と違う接客サービスに驚いたものが多かったが、火鍋店ではこれらとは違う意味で驚いた。私が訪れた火鍋店は 24 時間営業だった。店内は順番を待つ人で溢れかえっていた。この多くの人を飽きさせないようにと、さまざまな工夫がされていた。例えば、ネイルや靴磨きが無料でしてもらえ、待ち時間にフルーツやお菓子、飲み物が自由に取れるようなサービスがあった。また、小さな子どもが暇をしないようにと、キッズスペースに遊具が何種類か置いてあった。この火鍋店でのサービスは中国で受けたサービスの中では最も丁寧だと思ったが、店員のサービスが少し押し付けがましいと感じる場面も何度かあった。この火鍋店での言葉の通じなさから、慣れない飲食店に行くときは、事前に専門用語は調べていった方がいいと感じた。

日本に帰国する直前、北京ダックを食べに行ったが、この時専門用語を事前におさえていったので、それまで外食した中で最もスムーズに飲食店での会話ができたと思う。

中国留学は毎日がとても刺激的だった。4 ヶ月半という期間だったが、価値観や考え方が変わった点もいくつかある。20 年間、家族、それまでにできた友達、さまざまな環境によって、私自身のものの考え方はできたと思うが、それが 4 ヶ月半で変わったことに、とても驚いた。はじめて歩く道ではじめて見る景色、はじめて食べるもの、はじめて感じた気持ちや悩みなど、それら全てが私のそれまでの考え方を少しずつ変えた。異なる価値観、考え方の人、人種、宗教の人と実際に留学の期間を通じて会って、中国語で話をしてみて、自分自身の知識の乏しさを感じ、いままでに興味がなかった分野にも興味を持つようになった。中国留学中に出会ったすべての人に本当に感謝している。